

R18-G

18歳未満の  
閲覧・購入禁止

# メガミ×アドヴェント

# メガミ×アドヴェント 体験版

恵満 = 著  
スガレオン = イラスト

## # 1

悪魔<sup>エクソシスト</sup>祓いの少女は岩に掘られた階段をひたすら降りた。しばらくすると、大きく開けた洞窟に出る。地下なのに幻想的でうっすらと明るい。壁に生えた光苔のせいだろう。

ドーム状の天井はいかにも頑強で、奥には古ぼけた神殿が見えた。そこまで敷石の続き、両脇には水面が広がっている。磯臭いから海と繋がっているのだろう。

「海魔<sup>クラゲン</sup>を封じた洞窟の中に邪教の神殿…… 人攫<sup>ひとさら</sup>い住処としてはなかなかの雰囲気ですわね♡」

不敵に笑い、修道服のスカートの裾を掴んで持ち上げながら奥へと進んだ。

明らかな人工物である神殿と、天然の巨大洞穴は風化していて境目が曖昧になっている。不思議な調和を感じつつ、神殿の内部に繋がる大階段を登りきった。

列柱が並ぶ大広間に人影が佇んでいる。

「あらあ？ どんな悪魔が待ち構えているかと思ったら、随分と可愛らしい姿ですわね♡」

頬を朱で染め、悪魔祓いの少女は上唇を舌で舐める。まるで獲物を前にした肉食獣のようだ。一方、悪魔と呼ばれたのもまた年頃の近い少女である。

悪魔は紫色の瞳で悪魔祓いをジッと睨み、眉根にシワを寄せていた。メロンほど大きい乳房を白い前垂れで隠し、濃紺のパンツにブーツとグローブを合わせた服装である。

キュッと括れた腰とヘソ、むっちりした太もも、二の腕が露出していて、肉付きの良さがうかがえた。

そんな瑞々しい肢体を金色の部分鎧で覆い、頭部から背は菱形の白亜のフードによって守りを固めている。さらに腰のあたりからは4本の多関節サブアームが見えた。

彼女は海魔クライクンに仕える武装神官である。

「でも頭からイカをかぶった姿は滑稽ですわね♡」

「去りなさい。ここは海神の聖域です」

ねっとりとした視線を無視されても悪魔祓いは余裕の態度を崩さない。これから蹂躪する獲物の容姿を堪能している。

「こんな古ぼけた神殿が聖域だなんてお笑い草ですわ。神とは天にひとつ。それは私たちの教会と共にあるのです♡」

「ベラベラとよく喋りますね」

「あら、失礼。ですが私もただ興味本位で来たわけではありません。近隣の村から若い娘が失踪

する事件が続いていましてね……」

「何が言いたいのですか？」

「悪魔に攫さらわれ、凌辱の限りを尽くされ、骨ごと喰われたというストーリーはどうでしょう。この筋書きなら行方不明者を探す必要ありません♡ 犯人である異教徒あなを排除すれば教会の威信も増しますし、素晴らしい結末が待っていますわ♡」

武装神官の少女はゴミでも見るように目を細める。

世の主流たる教会の横暴は有名だ。

しかし、聞くのと目の当たりにするのでは不快感が段違いで、吐き気が込み上げてくる。

「つまり、行方不明者を搜索するわけでもなく、最初から殺る気で足を踏み入れてきた……と？」  
「は♡♡」

「他に言いたいことはありませんか？」

「ありませんわ♡ 御託はこの辺にしておきましょう。異教徒滅ぶべし、変身♡」

悪魔祓エクソシストいの少女が胸の前で十字の印を切ると、修道服が爆ぜて裸体が露わになる。

小柄で華奢ながら胸部にはしっかりとポリウムがあって、艶めかしい体だった。

ピタリと閉じたツルツルの秘部にそっと指で触れ、そのまま子宮の上とヘソを撫でる。

聖なる光は、太ももから爪先、手首から肘、そして腰からつま先へと広がった。

光が収斂し、悪魔祓エクソシストいは身体のラインをピタリとトレースしたボディスーツの上に装甲を纏っ

た姿となる。

「その武装、やはり『メガミ』でしたか……」

忌々しそうに神官の少女が呟き、虚空から超重量給のハンマーを呼び出す。白亜の塊には薄桃色に輝くエンブレビングが施され、明滅を繰り返していた。

「異教徒のお名前は？ 私に浄化された者は大抵、言葉を失って涎を垂らすだけの木偶デケに成り下がってしまうのです。そうなる前に教えていただけませんか？」

「ラーニアです。そういうあなたは？」

「私には個を表す名がありません。魔を滅し、邪を討つのみ。ただエクソシストとだけお呼びください♡」

## #2

名乗りを終え、互いに構えを取る。ラーニアはハンマーの柄を握りしめて腰を落とした。飛び退くことも、飛び込むことも容易いように足のスタンスを広げる。

一方、エクソシストはフランミンゴのように片足立ちとなった。

奇妙な構えに訝しみ、ラーニアは細める。一見すると隙だらけなのだ。

(カウンター狙いでしょうか……)

警戒しているとエクソシストはバレリーナの如くクルクルと舞う。

回転に合わせて脚部を防護するスカートアーマーがふわっと浮き上がった。装甲板の内側には円錐形状のバーニアが並んでいて、一斉に推力を吐き出す。

エクソシストの回転は勢いを増し、すぐさま青い竜巻と化した。

神殿の内部には潮気のある空気が流れ込み、上昇して天井にぶつかる。屋内だというのに激しい風が吹き、轟音がラーニアの鼓膜を叩いた。

あんな大味な回転技では満足に回避できまい。そう踏んだラーニアはハンマーを振り上げ、竜巻目掛けて飛びかかった。

「はああああっ！」

無骨なハンマーに全身の力を乗せ、垂直に振り下ろす。

空を切る音は竜巻の起こした風にも勝った。

続けて硬質な金属音が無数に重なる。ハンマーは竜巻と鏢迫り合いとなったが、回転の勢いに負けて真上へと弾かれた。

どうにか得物を手離さずに済んだラーニアは背筋に冷たいものを感じ、背から生えたサブアームで床を蹴って後退する。

ピタリと回転を止めたエクソシストはスカートアーマーから2丁拳銃を取り出した。

「あははははっ！ ヤワな攻撃ですこと♡ つまらない戦いをダラダラ続けるのはお互いに苦痛でしょう？ 私の信心を乗せた聖なる弾丸パレットで幕を引いて差し上げますわ♡」

再び、回転。

それに合わせてトリガーが引かれる。

竜巻を中心に放たれた無数の弾は無差別に天井や列柱を破壊していく。

「くっ……」

歯噛みしたラーニアはハンマーの柄を身体の前で回転させ、防御に徹して弾丸を叩き落とした。

一発たりとも攻撃は届いてこないが、同じ場所で釘付けにされているわけにはいかない。早く止めなければ神殿の被害が大きくなる。

(無尽蔵に弾を撃つなんて不可能に近いはず)

どこかに攻撃の切れ目がある。その隙を突く。

そう目論んでいたラーニアに向けて、今度は竜巻が体当たりを仕掛けてきた。

スピードは決して速くない。横に飛んで難なく回避できた。

しかし、エクソシストが突っ込んだ壁はドリルの刃先に触れたみたいに抉り取られている。その衝撃で、神殿の天井からパラパラと小石が落ちてきた。

質量が大きい分だけ、弾丸よりも威力が高い。

(防御だけで凌いでいたら、先に聖域が潰されてしまう)



体当たりの後、周囲に向けた無差別発砲が再開される。

この攻撃パターンを交互に組み合わせるエクソシストに攻め疲れている様子は無い。

防戦一方だが冷静に観察を続け、3度目の体当たりのときに気付いた。

敵は体当たり中は弾丸を撃ってこない。その場に回転で留まって発泡している。

(移動中にリロードしている？ いや、リロードの隙を移動で誤魔化している！)

ラーニアは体当たりを回避しながら、聖なる弾丸のシャワーを浴びた跡を確認した。本人が信心を乗せた弾丸と説明していたが、あれだけ撃つたのに弾頭らしき痕跡は見つからない。

これは実弾ではない。

信心を込めているのではなく、信心をエネルギーとして発射している。『メガミ』なら、そういった非実弾兵器を持っていても何らおかしくない。

(弾丸は1度の攻撃で約400発。体当たりに使っている時間は30秒ほど。もし、400発分の信心をチャージするのに要する時間とイコールなら…… 弾幕が切れた間に防護を崩す)

ハンマーの打ち下ろしは弾かれる。

それは身を持って経験した。

狙いを絞り、プランを組み立て次のチャージを待つ。

「随分と大人しくなりましたわね♡ このまま浄化されてしまうといいでしょう！」

哄笑と共に青い竜巻が突っ込んでくる。どうやって回転しながら喋っているのが不思議だ。

既に神殿内部は崩壊しかけている。ラーニアは怒りを抑え、ギリギリまで引き付けた。

これまで全て横に回避してきたものを、今度は縦に避ける。

天井に達するほどの高さのジャンプだった。エクソシストからすれば、着地を狙うのに好都合である。

しかし、ラーニアは天井にピタリと張り付いて落ちない。背面のサブアームの爪を岩盤に突き立て身体を固定したのである。

銃口が真上に向けられたが、チャージには僅かに時間が足りず攻撃に隙間が生まれる。

サブアームの反動を最大限に使い、重力を上乗せしてラーニアは垂直落下した。狙うは回転の中心。もっとも回る力が弱い箇所だ。

初撃はパワーが足りずに弾かれたが、今回の威力は段違いである。

真上から叩きつけられた青い竜巻は消散し、神殿の床には巨大な放射状のヒビが走った。

「ちょ……あつぶねえですわね！ この私にケガでもしたらどうするつもりですのー！」

攻撃はギリギリのところまで届かなかった。エクソシストは直前で竜巻の回転を止めて防御体制に入ったのである。交差した腕の徹甲でハンマーを受け止めていた。

それでも凄まじい重さを受けたせいでエクソシストはブーツの脛あたりまで深々と地面にめり込んでいた。これまでの余裕の表情は消え、頬には汗を垂らしていた。

(思ったよりも頑丈。さすがは『メガミ』！)

防がれたハンマーはそのまま。引く動作で隙が生じてしまうからだ。

防御体制の相手に重量をかけたまま次なる攻撃に移る。

4本のサブアームの爪をエクソシスト目掛けて突き立て、さらにハンマーを押し込んで逃げられないように圧力をかけた。

エクソシストはスカートアーマーを巧みに稼働させ、3本の爪は防がれてしまった。

残る1本は軌道を逸らされ、相手の頬を軽く掠める。

その程度の傷でエクソシストは顔色を変えた。眉間にシワを寄せた恐ろしい形相である。

「調子に乗ってんじゃねえぞ、異教徒が」

目から殺意の光が放たれ、尾を引いた。

押さえつけていた筈のハンマーは難なくかち上げられ、ラーニアは体勢を崩す。

一瞬のうちに額が触れるほど肉薄された。凄惨な笑みを浮かべたエクソシストの顔で視界が埋まる。

気圧されたラーニアは硬直している最中、腹部に凄まじい衝撃を受けた。炸裂音が神殿の中に響いて、空気の衝撃が広がって壁を叩く。

ラーニアの腹の筋肉繊維がブチブチと音を立てて破断し、内臓が爆発したように膨張した。ひどい圧迫感によって胃が変形し、溢れた胃液が逆流して喉を焼く。

ラーニアの身体は『くの字』に折れて視界が真っ暗になった。ひどく短い時間での出来事なの



「ぐほあっ!？」

肺の下から抉り込むようにして拳がめり込んでいる。しかも拳銃を握り締めてナックル代わり  
にして威力を倍化させていた。

エクソシストが拳を引き抜くと支えを失ったラーニアは地面へと崩れ落ちる。

「鍛えられたお腹でしたから強めに叩いてしまいたわ♡ でも見た目より防御は薄かったよう  
ですな♡」

ビクンビクンと痙攣するラーニアの頭をエクソシストは踏み付ける。口調も表情もこの神殿に  
踏み込んできたときと同じ調子に戻っていた。

「おえっッ……」

「あらあ？ 寝ゲロにおもらしですか？ クッソ汚なくてお似合いですこと♡」

口蓋からは吐瀉物、股間からは黄金水。

ラーニアは尊厳を失った姿を晒してしまふ。

悪臭の中、エクソシストはうっとりとした表情で頬を赤らめ、つま先でグリグリとラーニアの  
髪を踏み躪る。

「まだまだ終わりじゃありませんわよ？」

「ほら、さっさと目を覚ましなさい♡」

顔に塩水をかけられ、ラーニアは意識を取り戻した。

背中が冷たい。重力の向きから、自分の姿勢が仰向けなのだ分かる。

ぼんやりとした視界が薄紫色の何かを捉えた。

それがエクソシストの髪だと分かるや否や、攻撃を仕掛けようと腕を伸ばす。しかし、手首は十字架を飾りつけた金具で地面に固定されて動かなかった。

それだけではない。足首も同じように固定されて大の字に寝かされている。

武器も鎧も消失していた。普段なら念じるだけで顕現するのだが、気絶している間に細工されたのか呼び掛けに応えてくれない。

場所は神殿の大広間だった。エクソシストの攻撃で列柱は破壊され、壁も粉々になっている。瓦礫のあまりない位置を選んで拘束されたのだろう。

「オネンネしている間に邪神の力は封じさせてもらいました♡ 神の力の偉大さがお分かりになりましたでしょう?」

「封印術などありきたりなものです。それを極上の奇跡のように見せるのは教会の常套手段……」  
「あらあらあ? 粗相の後始末をして差し上げたのに失礼極まりないですわね。でも、お口の中

までは拭ってません。ゲロの味が残っているのではなくて？」

「くっ……」

鼻を突く酸味を堪えながらラーニアは顔を背ける。嘔吐したのも失禁したのも覚えていたが、それを敵の前で認めたくなかった。

見透かしたエクソシストは楽しそうにラーニアの胸を踏みつける。立っていれば釣鐘状の見事なバストも、地に伏した状態では重力で左右に垂れ下がっていた。

それを爪先で押し上げ、胸を寄せて弄ぶ。

グニユッと変形する度にラーニアは声を押し殺している。足首を捻り込まれて痛いのに胸の奥底では妙なくすぐったさがあった。

「柔らかくて踏み心地がよろしいですが、バカみたいにデカイお胸ですねぇ。いったい何センチありますの？」

「……」

「ダンマリですか。では、私が直々に確かめるとしましょう♡」

胸を隠す前垂れを靴底で払いのけると、薄桃色の乳首が露わになる。

ピンと尖って形が良く、くすみも無い。エクソシストは半眼で口元を押さえるとつまらなそうに吐き捨てた。

「ドス黒く変色するくらい使い込んでいると思いましたが……まさか処女ですか？」

「う、うるさい！ 黙りなさい！」

「凶星ですかあ。邪神に仕える神官のくせして未使用オマンコだなんてガツカリです。いっそのこと魔女夜会サバトでもやってくれてくれた方がマシですのに」

「我らの神を侮辱するのはやめなさい」

「わざわざ悪魔祓いに来た私の身にもなったださる？ クソザコ異教徒なんて倒したところで締めりがありませんわ」

「勝手なことを——痛っッ！」

「未使用の割に感度のいい乳首ですわあ♡ こういうのはいかが？」

「や、やめて！ 私の胸で遊ばないで！」

足の裏で乳首を擦られ、何度も何度も靴底が往復する。

そのうちラーニアの乳頭は勃起して鋭くなっていた。

「勃起ちゃってますねえ♡ もしかして気持ちいいですかあ？」

「そんなわけ——くぅ……んん♡」

拘束されて手足が動かせず代わりに背が反ってしまう。

グリグリと踏まれ、乳首の突起が丰满な胸の中へ押し返されてジワリと体が熱くなった。

その熱が股間に伝わって愛液が滲んでしまい、ラーニアは反射的に脚を閉じた。しかし目敏いエクソシストは見逃さない。



「粗相の始末をして差し上げたのに、また濡れてしまいましたの？」

勃起乳首を蹂躪していた爪先が股間へとターゲットを変えた。

着衣の上から割れ目を抉られると快感よりも痛みが強い。

今度こそと声を押し殺すラーニアだったが、緩急を付けて満遍なく刺激してくる足先にいつまでも我慢はできない。

「うっ……く……ん♡」

「うーん、処女っぽいのにやたらと感じ易い。これは普段からオナニーに耽っているというセンが濃厚ですわねえ。このカビ臭い神殿で自慰をしていましたの？ 一体、何をオカズに？」

顔を背けて答えるのを拒絶する。エクソシストはそれまでの丁寧な胸マッサージをやめてサッカーボールのように乱暴に蹴飛ばす。

「痛ぁ……！」

「いつまでも優しくしてもらえるなんて勘違いしてるんじゃないぞ？ あんたの垂れパイ、肩凝るだろ？ 切り取ってゲロ吐くまで口に詰め込んだっていいんだからな？」

「こ、殺せ…… 私が生んでも海神の教えは消えない……」

「嫌ですわぁ♡ こゝんな愉快なオモチャが手に入ったんですもの♡ ぶっ壊れるまで弄んで、最後は我が信徒の前で首を刎ねて異教徒の末路を示します。それまでは殺したりしません♡」

別人のように口調を切り替えたエクソシストは、また元の甘ったるい声音に戻る。

しかし喋っている内容は野蛮で独善的だった。

「バストサイズもオナニーのオカズも答えていませんわ。さっさと白状しなければ、またゲロ吐いてもらいますわよ。今度は掃除してあげません♡ 吐いたものは子猫がミルクを飲むみたいにならぬ♡」

胸から股間へ。股間から下腹部へ。

これまでラーニアを弄ってきた靴底が移動していく。

それでも答えようとはしない。羞恥心が優って意地を張っていた。

しかし、気絶するほどの腹パンを受けた腹は内出血で真紫になっている。ちよつと触れられただけでも皮膚が裂かれたように痛い。

そんなところをまた踏まれたら……想像するだけで火照っていた身体が冷える。

「はい、残念♡ 時間切れですわ♡」

振り上げられた足を目の当たりにして、咄嗟に目を瞑って腹に力を込めた。

鍛えられたラーニアの腹筋はちよつとやそつとじゃ碎けない。しかし、今は無惨に腫れ上がっていて本来の防御力なんてなかった。

「ぐぼあっ!？」

体重を乗せた踵がラーニアの腹に勢いよく刺さる。

床に固定されているせいで逃げ場がない。

石造の床と踵に挟まれて周囲に放射状のヒビが走った。既に赤黒く腫れていたラーニアの腹が波打ち、胃液がまた喉を焼く。

エクソシストの予告通りに嘔吐してしまった。痛みで呼吸ができなくなって、酸素を求めて喘いでいると咳き込んで余計に苦しくなる。

「げほっ…… げほっ……」

横を向いて吐くと血が混じっていた。内臓がやられたのだろう。

ダメージの蓄積は深刻だ。腹部は痛覚すら怪しく、股は弛緩し、手足は痺れて動かない。

腹ばかり狙われて頭部は無事だった。おかげで思考はハッキリしていた。

むしろ、痛みや惨めさを自覚させるためにワザと狙っていないのではと疑いたくなる。

徹底的にサディスティックで、暴力を心底楽しんでる。紫髪の『メガミ』は聖職者にあらぬ恍惚とした表情を隠そうともしない。

一方のラーニアは悔しさに歯軋りし、目にうっすらと涙を浮かべている。

ここまで一方的にやられるなんて想像したこともなかった。しかも、負けたら死ぬものだと覚悟していたのに、生かされて辱めを受けている。

(どうにかして…… こいつを倒さないと……)

ここは海神の聖域だ。

守護職を務める自分が逃げ出すわけにはいかない。

しかし、海魔クラークアンドレスの舞鎧は封じられている。手足も動かせない。相手はこちらをなぶ蹴るつもりで生かしている。

「楽しいトークタイムなのに、ノリが悪くてガツカリですわぁ。もう一発入れて、さっさとお持ち帰りしちゃいましょうか」

耐えていれば隙が生じ、チャンスが巡ってくるかもしれない。

ラーニアは頬の内側を噛んで恥を押し殺した。エクソシストの足がゆっくりと上がり、踏み付けの大勢に入ったのを見計らってポツリと漏らす。

「……センチです」

「んん？ ボソボソと喋るんじゃないありません。聞こえませんかよ？」

「胸は、96センチです……」

途端にエクソシストが明るい表情を見せる。周囲には花が咲いていた。

相手を屈服させたことに喜びを感じているのだろう。

「クソでかいですわねえ！ 道理で揉み甲斐があるわけですわ♡ それで、感度抜群なのは普段からオナニーに耽っているからでしょう？ 違いますか？」

「……はい」

真っ赤になって顔を逸らすラーニアだったが、その顎をつま先でグイグイと押されて上を向かされる。

「私の目を見て答えなさい。あ、ブーツにかかったあなたのゲロは後で舐めとってもらいますわ。いいですね？」

「……はい」

「どうやってオナニーしているのか話さない♡」

「ペ…… ペニスをシゴいて…… 射精しています……」

予想外の答えに、エクソシストの眉が吊り上がる。まじまじとラーニアの股間を眺め、それからまた視線を合わせてきた。

「まさかあなた、女の子なのに生えていますの？」

「ドレスの副作用です…… 力を使い過ぎたり、性的に興奮すると…… ペニスが生えてきちゃうんです。それを鎮めるために……」

「ふうん…… なら、試してみましよう♡」

薄笑いで目を細め、エクソシストはラーニアの顔面に腰を下ろす。口と鼻を股間で塞がれて呻くも、退いてくれる気配は無い。

インナーの布越しに蒸れた秘部を押し付けられ、鼻腔に雌の臭いが広がる。

息苦しさから逃れようとしても、むっちりとした尻肉を顔に押し付けられて動けなかった。しかも、股の部分はジワリと湿っている。

責め苦を負わせることに興奮し、エクソシストは既に濡れていた。

顔面騎乗を許した屈辱に震え、ラーニアは自分の心を抑えつける。

四肢を拘束され、口まで塞がれた体勢からではろくな抵抗なんてできない。

「あん♡ 鼻息がくすぐったいですわ♡ けど、妙な真似をしたら私の花園で窒息死してもらいますから大人しくしてくださいね♡」

「ングググっ、んん……」

「さて、と。ラーニアさんのアソコはどんな具合でしょうねえ♡」

痛めつけた腹の腕に片手を突き、もう片方の腕を伸ばす。

着衣の隙間にするりと手が伸び、下着のさらに下を弄ってくる。ヘソ下を他人の手が滑る感覚に嫌悪を覚えていると指先が秘部に到達した。

「あっ、予想通りピタリと閉じてますねえ♡ しかもツルツル♡ 陰毛のお手入れもしているのですか？」

「んぐっ、ぐ……」

割れ目に沿ってなぞられると背中に悪寒が走った。

誰にも触れることを許していない肉土手を指で押されると体温が上がり、呼吸が激しくなっていく。

「いっけなく♡ 答えられる状態じゃありませんわね♡ まあ、パイパンということにしておきましょう。その方がラーニアさんにはお似合いですし」

2本の指が割れ目を右と左に広げ、媚肉が空気に触れる。敏感に反応をってしまったラーニアは背筋を硬直させた。

当然、顔面騎乗しているエクソシストにも伝わってしまう。

「ヒクヒク動いているのが分かりますわぁ♡ どうです？ ペニス生えちゃいます？」

「ぐっ……」

「まだまだ気持ちよさが足りないみたいですよわね。これならいかが？」

スウーっと思指が膣口を這い、陰核を探り当てた。エクソシストは小さな蕾を摘んで、緩急をつけながらラーニアの反応を探る。

いくら我慢していても身体は素直だった。刺激されたクリトリスは勃起して、どんどん大きくなっていく。

その成長速度は尋常ではない。豆粒大だったものが小指くらいの大きさに、小指くらいだったものが親指くらいに、親指くらいだったものが次第に腕ほどの太さに……

最早、摘むことなんてできない。エクソシストは呆気にとられながらも肥大化したペニスを握り締めていた。

「うわっ、なんなんですよのこれ!! 私の腕よりも長くて太い…… それに横から小さなペニスがか本も…… まるでヒュドラですよ! こんな化け物グロちゃんぽを隠していたなんて、はしたなくて笑ってしまいますわね♡」

ラーニアの股間から生えたペニスは想像を絶していた。

中央に聳える1本は腕ほど太さがあり、立派に屹立してそり返っている。鈴口はボール大で、人間の女性が呑み込めるようなサイズではなかった。その根本からはさらに小さなペニスが4本も生えている。

ツルツとした質感で色が白いため、ビクビクと震えていなければ女性器の破壊を目的とした極悪デイルドに見えた。

しかし、うっすらと表面に走った血管の脈動から巨大ペニスはあくまでラーニアから生えて、彼女と生体的に繋がっていることを示唆している。

合わせて5つの鬼頭が天を突き、その様子にエクソシストは腹を抱えて笑った。

「このペニス、どうやってシゴいていましたの？ 片手じゃ掴むのも難しいのに。それとも両脇から生えた小さな2本を両手で片方ずつ？ 私、とても興味がありますわ♡」

ラーニアの顔を椅子にしていた腰を退けて、エクソシストはペニスの周りを歩いてまじまじと観察した。

全く萎える気配はなく、見られることに興奮しているのか不穏にビクンビクンと跳ねている。「んん、これだけご立派だと本当に神経が繋がっているのか怪しいですわ。ちょっと確かめさ

せてもらいます♡」

(体験版ここまで)